
魔王の賓客

洋式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の賓客

【Nコード】

N2236Z

【作者名】

洋式

【あらすじ】

「最近思ってます。やっぱり、平和っていいなって」少女が生贄として送られた先にいたのは、平和とレース編みをこよなく愛す魔王けれど、魔王の平和ボケには理由があつて……。少女は魔王の本性を取り戻すことができるのか？少女と魔王のファンタジア。

生きて行く為には、その場において価値ある人間にならなければならない。

それはキイリが幼くして身に付けた哲学であり、処世術である。

「ねえ、キイリお姉ちゃんどこに行くの？」

「お姉ちゃんね、皆の為にお星さまになるのよ」

冷たい風が吹きすさぶ、小さな村の一角。集まった人々の合間から聞こえた声に、ネリはぎゅっとスカート裾を掴んだ。

（だからこれは、生贄になる以上の価値を見せられなかった私が悪いのよ）

荒れた赤土に描かれた、大きな魔法陣。キイリは背後に立つ村の男二人に追い立てられるように、その陣の中心へ向かって歩いた。

（短い人生だったわ）

何しろ、生まれてまだ十二年。

いくら上手に自分を納得させた所で、もう少し生きてみたかった、という未練は消せない。

叶うなら逃げたい。泣き叫んで、助けを求めたい。

けれどキイリは、その全てが無駄な願望だと知っていた。

この村にはいま、国から派遣された軍が駐在している。間違いない生贄を差し出すか見張るためだ。逃げるなど無謀にも程がある。

そして泣き叫んだ所で、自分を助ける人間はいない。その価値がないから、いま自分はここにいるのだ。

「これより、生贄を送る儀式を始める」

傍に立つのは、国から派遣された魔術師である。

低い声がそう告げると同時、陣を描く線は青く光り、風が吹き上がった。舞い上がる、キイリの短い黒髪と、砂埃。

溜まらず目を閉じつつ、キイリは両腕で顔を覆った。

（せめて、苦しまずに逝けますように……！）

縋るように願うものの、それが無理な注文だとは分かっている。
これから送られる先を思えば。

(……魔王セフィクレイ)

その名を、この大陸で知らぬ者はない。

破壊を尊ぶ魔族のなかでも異端とされるほど、冷酷で残虐。

指先一つで山を沼地に変えると言われる、最強の魔族である。

その魔王の元へ、これから送られるのだ。

不意に風が止み、辺りを包む空気が変わる。

移動が完了したのだと悟り、キイリは恐る恐る目を開いた。

「ここは……」

戸惑いをあらわに、呟く。

なぜなら、目の前に広がる光景が余りに予想と違ったためである。

想像していたのは、薄暗く、血なまぐさい部屋。ケタケタと笑う

魔族に、異形の姿をした恐ろしい魔王。

けれどキイリを迎えたのは、窓から差し込む穏やかな日差しであり、部屋に飾られた花の匂いだった。

品のいい調度品に、壁には絵画まで飾られている。

これでは魔王の部屋というより、人間の王の私室だ。

そして窓際の椅子に座る、一人の青年。

長く艶やかな、青銅色の髪。真白の肌と、宝石のように澄んだ赤い瞳。

人間離れた美しさではあるが、とても魔王とは思えない。

白いシャツに、黒のベストとズボン。格好も、貴族然としたそれである。

「……魔王？」

震える声で尋ねると、彼はにっこりと笑って頷いた。

そして手に持っていた編みかけのレースを傍のテーブルに置き、イスから立ち上がる。

(……編みかけのレース?)

自分が見た光景を理解できず、キイリは俯いて冷や汗を流した。

(な、何！ どうなってるの！？)

もしや来る場所を間違えたのか、と思う。

けれど魔王か、との問いに彼が頷いたのだから、それは考え難いことだった。

魔王が、キイリの前に立つ。ビクツ、と小さな体が震えあがった。

(こ、殺される……！)

何が何だかわからないが、目の前にいるのが魔王だというなら、生贄である自分がそうなることは間違いない。

泣くまいと決めていたものの、恐怖のあまりに涙がこぼれ、視界が歪む。

「こ、ごめんなさい！ 痛くしないで！ ひ、ひと思いにやっってください！」

「よく来てくださいました、我が客人」

意味もなく謝りつつ頭を抱えたネリの言葉と、穏やかな魔王の声が重なる。

一拍置いたあと顔を上げれば、魔王はキイリの前に膝をついていた。視線が近づいた彼の顔を見て、少女は首を傾げる。

「……え？」

きよとん、とした顔で声を漏らせば、魔王も「え？」と首を傾げた。

「あの……、わ、私……」

「貴方は、私の呼びかけに応えて来て下さったのでは……？」

「え、いや。そうですけど……」

嗚咽を堪えつつ頷けば、魔王は「よかった」と胸をなでおろす。

そして胸元から白いハンカチを取り出し、キイリの目元をぬぐった。

「この日を楽しみに、ずっとお待ちしていました。……名前を伺っても？」

「キイリ……です」

小さな声で名乗れば、魔王は「キイリ」と嬉しそう反響する。

「響きの良い名ですね」

「あ、ありがとうございます」

戸惑うキイリに、魔王は穏やかな笑みを浮かべ、立ち上がった。同世代の中でも、キイリの身長は高いほうではない。それに加えて魔王が長身で、見上げる首が痛くなる。

けれど魔王はすぐに腰を折り、キイリの小さな手を取って、その甲に口づけた。

「歓迎します、キイリ。ようこそ、我が城へ」

低く心地よい声が鼓膜を揺らす。

バクバク、と。まだ大きく動く胸もとを押さえながら、キイリは首を大きく横に傾けた。

(……………どうなってるの!?)

「お口に合うと良いのですが……」

窓から差し込む光がテーブルを照らす。その上には、紅茶の注がれたティーカップ二つ。

魔王はキイリに茶菓子を差し出しながら、はにかむようにそう言った。

「ありがとうございます……」

一先ず座るようにと促されたのは、窓際のテーブルの前。ふわふわのクッションが置かれた椅子は信じられないほど気持ちいいが、座り心地を楽しんでいる余裕はない。

(……何かの罠に違いないわ)

差し出された茶菓子を睨みつけながら、キイリはそう心の中で呟いた。ついでに匂いに釣られた唾液を呑み込む。

(騙されちゃ駄目よ。安心した所をやっちゃうつもりなんだわ。これも毒入り……はっ、もしかして太らせて食べるつもりかも)

キイリの体型は、お世辞にも健康そうとは言えない。

余りにやせ細った子供が来たものだから、少し太らせてやるうという腹ではないか。

そう疑って眉根をよせるキイリに、魔王は「さて」と呟き、テーブルに両肘をついた。そして重ね合わせた手の甲に、顎をのせる。

(……乙女か！)

少女ちつくな動作に、おもわず心の中で突っ込みをいれる。さすがに声に出す勇氣はない。

「本題に入らねばなりませんね、キイリ」

憂いを帯びた笑みをうかべつつ、魔王が呟く。

「……本題、ですか？」

「ええ。あなたも疑問に思っているのではないですか？ここに招

かれた理由を」

「いや……」

疑問も何も、キイリは生贄として送られたのだ。いたぶって遊ぶ為の玩具か、食糧か。良く考えても、奴隷として働かされるか。

そう覚悟をしてここに来たのである。

(でも、これはチャンスかもしれない)

膝の上に乗せた手を、ぎゅっと握った。

(畏でもいい。私に価値があれば……、生きていられるかもしれない)

そう思うと同時に、覚悟が決まる。キイリは顔を上げ、魔王の顔を見つめた。

「気になります。教えてください」

しっかりとした口調でいえば、赤い目が感心したように細められる。

魔王は表情を和らげ、小さく頷いた。

「実はこれでも私、昔はそこそこやんちゃをしていたんです」

「……はあ」

魔王の言葉に、キイリは曖昧に頷く。

「そしてあれは、五十年程前。私が気まぐれに人間の国を襲った時のことでした。抵抗をしてきた軍の中に、少々使える魔術師がいたのです」

「もしかして、オディウス帝国……?」

「言われてみれば、そういう名だったような。キイリ、知っているのですか?」

「えっと、はい。……有名ですから」

そもそも、魔王の「やんちゃ」を知らない者はない。だからこそ国は逆らうすべもなく、魔王の要請に応えて生贄を差し出したのだ。そして数ある逸話のうち、最も有名な話がオディウス帝国の落日。その軍力で大陸一の大国に成り上がったオディウスが、魔王一人の前に、たった一夜にして滅び去った話だ。

何より人々を嘆かせたのは、人間の英知と言われた魔術師。賢者
レイトすら成す術なく破れさったことだった。

「彼の者は私に叶わぬと悟ると、自身の命と引き換えに、私にある
魔法をかけたのです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2236z/>

魔王の賓客

2011年12月11日17時47分発行